

第7章 文化的景観としての本質的価値

本章では、奈留島及び久賀島の文化的景観としての特徴を、地質・地形、植生とその利用、集落構造の観点から記述し、その関係性を明らかにすることを通して、文化的景観の価値及び保護を図るべき範囲を明らかにすることとする。

第1節 久賀島及び奈留島の文化的景観の特徴

①地質・地形

下記の図7-1は、五島列島の地質を概略的に示した図である。黄色が、五島列島の地質的基盤層となっている堆積岩(五島層群)、ピンク色が堆積層形成後の地殻運動によって貫入した花崗岩類、薄茶色が火山性大地である。

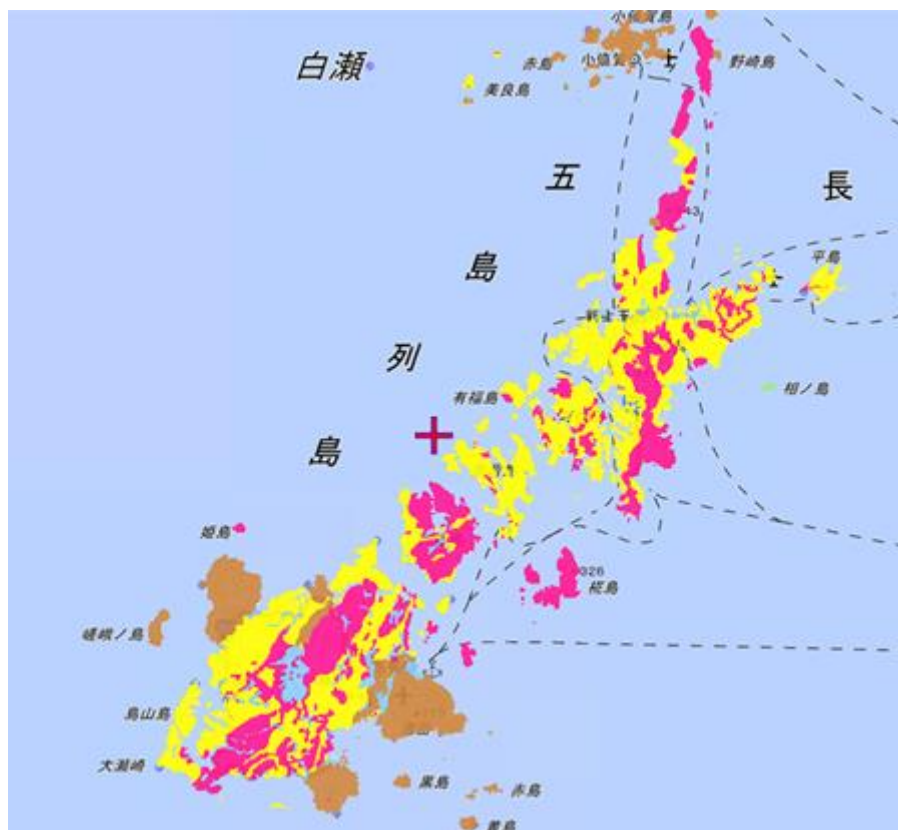


図7-1 五島列島地質概略図

久賀島は、五島列島の南部に位置し、地質的には第三紀中新世に堆積した堆積岩類(いわゆる五島層群)と中新世中期に貫入した花崗岩類からできている。堆積岩は砂岩、泥岩及び凝灰岩で、一部熱変質を受け硬化、ホルンフェルス化している。地形は、湾口を北に開いた久賀湾

が島の中央部まで食い込み、馬蹄形をなしている。この湾を囲んで見下ろすように、西部には久賀島の最高峰である鶴岳（標高 357m）をはじめ番屋岳、牡鹿岳、犬卸山、島南部から東部にかけては野園岳、白岳、福見岳など 2~300m 級の山々が連なっている。

これらの山系に源を発して大開川（2.7km）、市小木川（2.2km）、猪之木川（2km）、大野川、大畦串川等の河川が、地形的影響から島中央部の久賀湾に流入する。そのため、久賀湾を囲む地形は湾に流れ込む中小河川の影響により浸食され、下流域には浸食作用の結果形成された沖積地が点在し、久賀湾を囲む一帯には、山の中腹から河川の河口部に向け五島列島には珍しく広大な水田風景が形成されている。また、久賀湾に面する河口域の各所には、塩性湿地が広がるが、一部は農地拡大のために干拓され、水田地として利用されている。

一方、島の外周は五島列島の地形的特徴である連なった急峻な山々がそのまま海に沈みこむ地形となっており、特に海流や季節風の影響を受けやすい島の西側は、険しい海食崖が発達している。そのため、西側に流れ出る河川は皆無であり、耕作地としての利用も不可能で、集落も築かれることはなかった。

逆に、海流や冬場の厳しい季節風の影響をあまり受けない島東部は、小河川が外海に向かって流れ出て、河口域に集落（蕨、福見、五輪など）が築かれ、集落周辺の傾斜を利用して小規模な棚田や段畑が形成されていった。

奈留島は、五島列島のほぼ中央部に位置し、地質的には、主に第三紀中新世に堆積した五島層群と呼ばれる堆積岩類からできており、リアス式海岸など複雑な地形を有している五島列島の島々のなかでも、海岸線が複雑に入り組み、特異な地形を成している。

四方に伸びた細長い半島の両側には、小規模河川の浸食により狭隘な谷迫地形が形成されてきた。河口域には極小規模の沖積地が形成され、やがて沿岸流の影響により、砂礫が河口域を塞ぐかたちで堆積し、砂州を形成する。砂州の背後（陸地側）は後背湿地やラグーン（潟湖）となっていた。このような狭隘な谷迫地形（下流域にラグーンや後背湿地が形成されている）は、五島列島の各地で確認できるが、奈留島ほど顕著に確認できる地域はない。

複雑な海岸線は、湾が深く入り込むことになり、そのような湾や入江は古来、天然の良港として利用されてきたが、細長い半島地形の集合体とも言える奈留島においては、平野部が極端に少なく、集落が築かれる場所が限定され、生業を営み、居住に適した島とは決して言えない環境下にあった。

両島の地質を改めて概観すると、久賀島が主に花崗岩の貫入から形成されているのに対し、奈留島は五島層群と呼ばれる砂泥による堆積岩から形成されている。この地質の違いが、両島のその後の生業活動に大きな差異を生むことになった。

一般的に、花崗岩類の土壌を持つ地域は、花崗岩が風化して真砂土となると、保水性に優れ、稲作に適した地域とされる。花崗岩の貫入を主体に形成された久賀島は、五島列島でも有数の米の生産地として発展してきた。

一方、奈留島は細長い半島が四方に伸び、平地が少ないという地形と相俟って、稲作があまり発展せず、半農半漁（農業は主にサツマイモを中心とした畑作）、やがて近代になり漁業中心

の島として発展してきた。

両島の地形的関連性を示す景観構成要素の一つとして、久賀島と奈留島に挟まれた水域である奈留瀬戸がある。奈留瀬戸は、幅は最も広い場所でも2 km もなく、深さは一番深いところで水深 50～60m ほどである。幅の狭い瀬戸ゆえに、潮汐の干満による激しい潮流が生じる。しかしながら、島間の距離がさほど離れていないために、潮流が激しい時間帯においても、うまく潮流に乗れば島間の往来は比較的容易であった。このことが、瀬戸を中心とした両島の往来を容易にし、久賀島(東岸の集落)と奈留島(西岸の集落)との関連性が強く結びつく結果となった。

下記の図7-2は、五島列島の航空写真であるが、各島に挟まれた瀬戸から、潮汐の干満による激しい潮流が生じているのがわかる。瀬戸から流れ出た激しい潮流は、五島列島西方沖合を流れる対馬海流とぶつかり、プリューム(煙状の流れのこと)を形成しているのがわかる。このような海域は、好漁場として知られる。奈留瀬戸は2棟をつなぐ唯一の交通道であるとともに、その激しい潮流が奈留島での漁業を育んだといえる。



図7-2 図の上方が西にあたる。

各瀬戸から西方に向かって流れる煙状の潮流(プリューム)が確認できる。

②植生とその利用～久賀島、奈留島の照葉樹林に対する関わり方～

五島列島の植生は、温帯に成立する常緑広葉樹林であり、その中でも照葉樹林が顕著である。照葉樹林とは、森林の群系の一種で、構成樹種に葉の表面の照りが強い樹木が多いのでその名があり、代表的な構成樹種は、ヤブツバキ、シイ・カシ類、タブノキなどである。

顕著であるがゆえに五島列島の人々は、程度の差はあれ、この照葉樹林の構成樹種に対して関わりを持ってきた。その関わり方の代表的な事例が、久賀島と奈留島北西部域で確認できる。

ここで43～44Pの植生図をもとに、久賀島、奈留島の植生分布を概観してみたい。奈留島の植生分布においては、島の東側と西側では相違があり、東側ではシイ・カシ二次林が発達するのに対し、西側ではタブノキーヤブニッケイ二次林が発達する。久賀島においては、主に東側から南側(の外海側)にかけてタブノキーヤブニッケイ二次林が発達し、北西側ではシイ・カシ二次林が分布する。つまり、奈留瀬戸を挟んで対面する久賀島東側と奈留島西側は、同様の植生分布形態であることがわかる。

これらの相違、関連性が、それぞれの島の植生利用にどのような影響を及ぼしてきたかを下記に述べる。

久賀島では、照葉樹林の代表的な樹種であるヤブツバキの自生が密に確認でき、そのため積極的に利用し、島を代表する産業へと発展させてきた。ヤブツバキは、木質は固く緻密で均質であるため、工芸品、細工もの等に使われ、木灰は染色用の原料として、利用されてきた。またヤブツバキの種子(実)からは良質のツバキ油が取れ、その用途は、整髪用、美容食用、燃料用など広範囲にわたり、利用価値は非常に高いものであった。

ツバキ油は、久賀島の特産物となり、村制時代から島の特産物であるツバキ油の生産を維持する目的で、条例でツバキの伐採を禁じ、保護に努めてきた。これにより、元来ヤブツバキの自生密度が高かったこともあり、島内の各所にツバキ林を形成することとなった。このうち、島東部に所在するヤブツバキの原始林は長崎県の天然記念物の指定を受け、文化財として保護されている。また、伐採を禁じていたためか、現在では珍しいヤブツバキの大木も島内各地に数十本確認されている。

このため、久賀島の植生状況を概観すると、他の樹種に比較してヤブツバキの自生が優勢となっており、久賀島の森林域におけるヤブツバキの自生密度は下五島の他地域よりも密度が濃い結果となっている。

このように久賀島における自然的空間(主に植生)は、ツバキ実の採種及びツバキ油の生産を発展させていく上で、ヤブツバキ樹を保護するという人為的な影響を与え続けられたことにより形成されてきた文化的景観となっている。

一方で、ヤブツバキと並ぶ照葉樹林の代表的な構成樹種であるタブノキであるが、ヤブツバキと違い利用価値がそれほど高くない。一般的には、建築材料としてはあまり利用されず、薪材としての利用が主であったといえ、いわゆる特定の利用対象となる樹木以外の「雑木」とみなされていた。久賀島は、古くより薪の供給地として知られていたが、多分にタブノキの割合が多かったのではと推察できる。

ヤブツバキと違い利用価値がそれほど高くないがタブノキであるが、条件が揃えば象徴性も付与されることがあったともいえる。

第一に群生としての象徴性であるが、そのことを示す事例が、江上集落に所在するタブノキの群生である。江上集落南側の山腹に築かれた江上天主堂の正面には、タブノキの巨木の群生が見られ、江上集落の景観構成要素として顕著な特徴を示している。タブノキの群生は下五島地域の海岸域に幅広く見られるが、人間の活動域と重なる形でこれだけ大規模なタブノキ群が残存している例は他にはないが、福江島北部に所在する戸岐神社の社叢には、自然林のタブノキ・ムサシアブミ群落が象徴的に残されている(魚付き保安林)。

また大串集落内に所在する木徳宮は、タブノキの巨木に依代としての象徴性が付与され、祭祀を通してその象徴性が持続されている事例であるが、大串集落が漁村集落であることを考えると、出漁する際の方位の目印となる「当て木」として保全されてきた可能性もある。このことから言えることは、タブノキの巨木という景観要素が、陸域からの視点だけではなく、海域から景観要素としても捉えられていたことが言える事例であろう。

以上のことからタブノキは、その群生、あるいは巨木の象徴的保全を通して、下五島地域における自然(照葉樹林)と人間との非積極的な関係を表現していると考えられる。なお積極的な関係を表現するものが、ツバキの利用であることはいうまでもない。下五島地域の文化的景観、森林の利用、屋敷林としての景観を特徴づけるものとして、ツバキとともにタブノキは重要な要素なのである。

タブノキの群生が残される条件には、自然条件とともに人為的条件も深く関係していると思われる。下五島地域の照葉樹林において、高い利用価値が認められ、天然林としてのみならず屋敷林としても保全・利用されてきた樹種の代表は、先述したようにヤブツバキであり、その利用が顕著にみられるのが久賀島である。その一方、薪炭材などの利用価値はあるものの、敢えて植林する種類ではなかったのがタブノキである。人間の活動域に近いところでは、自然林もしくは二次林として存在したタブノキの多くは薪炭材等として粗放的に利用され、伐採後はスギやヒノキの植林に代替されていったと考えられる。その一方で、島内の主な人間活動域から比較的離れたところ、すなわち近世後期以降、新たに潜伏キリシタンの移住集落が形成されたような場所には、比較的近年までタブノキの群生が残ったと考えられる。そうしたものが江上天主堂前のように意図的に残されて、教会堂とともに集落景観を特徴付ける重要な景観構成要素となっていると考えられる。

以上のように、奈留島におけるタブノキの群生は、それぞれの集落の生活・生業、信仰に関わる景観要素としての機能を果たしてきた。

今日の下五島地域における森林のほとんどが人の手が加わり、原始の姿を止める森林はほとんど残されておらず、福江島や久賀島ではスギ、ヒノキの植林が進み自然林が非常に少なくなっている。残った自然林も薪や木炭を得るため繰り返し伐採した後にできた二次林である。これは、江戸期になって生活燃料、建築用材として伐採されたばかりでなく、製塩業・煮干製造等の薪として盛んに切り出され、また島外にも売り出されたためである。中でも久賀島産の

薪は良質で評判が良く「久賀薪」と呼ばれ、本土部を始め五島各地にも売り出されており、すでに安永年間には、製塩業が盛んであった瀬戸内（播磨）からも買い付けに来たという記録がある。

一方、奈留島の地形は、細長い半島と急峻な山地形のため、平地に乏しく、平野部を持たない。山林面積も小さく山林から切り出し荒廃させてしまうと漁場にも悪影響を与えるため、奈留島においては、久賀島ほどの積極的な山林の利用（雑木の伐採など）はみられなかった。このことは、現在でも、集落背後の山林を保安林として保全していることからわかる。

奈留島では、明治後期以降漁業（イワシやキビナゴの煮干し加工）が盛んになるにつれ、隣の島である久賀島から大量の薪を買い入れていた。奈留島の特産物であった鰯の煮干しの製造に使用される薪はほとんどが久賀島から刈り出されたもので、奈留島の基幹産業の発展に大きく寄与しており、奈留島と久賀島が強い繋がりがあったことがわかる。

地形・地質・水系などの自然環境に大きく影響を受けて形成された生業の場、集落や、人が営む生活・生業によって影響を受け維持されてきた植生などの自然環境は、久賀島及び奈留島の文化的景観を形成する上で大きな要因となっている。

③集落構造の特徴

「五島市久賀島の文化的景観保存計画」に収められた保存調査においては、久賀島の集落構造は、その集落の立地と土地利用に基づき、下に示す3つに分類されている。この分類をもとに、奈留島の集落構造の分析を行った。

A. 内海（久賀湾や深い入江）に面した集落

→傾斜が緩やかで河川を利用した広い棚田群が特徴

B. 外海（瀬戸）に面した集落

→急傾斜地で沿岸部の集落と傾斜地の段々畑が特徴

C. 内海と外海の両者の特徴を併せ持つ集落

→集落は外海に立地するが、耕作地が尾根を越えた場所にある点が特徴

先述のとおり、奈留島は細長い半島が四方に伸びるため入江が奥深くまで湾入しているが、久賀島と違い傾斜が緩やかな河川が発達しておらず、どの集落も狭隘な谷迫地形に囲まれた小規模な沖積地に築かれた集落である。

このことから、奈留島の各集落は、急傾斜地で沿岸部の集落と傾斜地の段々畑が特徴の「B. 外海（瀬戸）に面した集落」に該当するといえる。

ここでは、久賀島の集落構造を再度確認するとともに、奈留島の集落構造を記述する。

【久賀島の集落構造】

A. 内海に面した集落 → 傾斜が緩やかで河川を利用した広い棚田群が特徴

(猪之木、永里、久賀、市小木、大開集落)

このタイプの集落は、馬蹄形に並ぶ山系を背景として久賀湾に面して立地しており、猪ノ木、永里、久賀、市小木、大開の各集落が該当する。それぞれの集落は、水源である河川に沿うように緩やかな斜面に形成されている。

また、久賀湾に面した集落の水田に共通することは、傾斜が緩やかなこともあり、外岸の集落と比較して棚田・段畑の区画が大きく取られていることである。農業のための用水は各集落が面している河川から引かれ、田植えの準備が行われる3、4月には河川に沿った谷全体が河川の流域となるような幅広い棚田の溪谷が形成される。

B. 外海（瀬戸）に面した集落 → 急傾斜地で沿岸部の集落と傾斜地の段々畑が特徴

(田ノ浦、外上平、福見、五輪、^{ざざれ}細石流集落)

このタイプの集落は、集落の周囲・背後には急峻な山系が迫り、狭隘な谷迫地形を形成しており、奈留島の各集落と共通する集落構造である。

各集落に流れている河川は、その長さ、および、流域面積が久賀湾に流れ込んでいる河川と比較して短く、傾斜が急な河川に沿う急斜面に石垣積みの棚田・段畑が作られ、河口付近に漁港や集落（居住地域）が形成されている。

半農半漁の生業形態をとるが、漁業に重きを置いている。

C. 内海と外海の両者の特徴を併せ持つ集落

→ 集落は外海に立地するが、耕作地が尾根を越えた場所にあるのが特徴

(蕨集落)

第3の集落分類として、内海に面した集落と外海に面した集落の両方の特性を持つ集落があり、久賀島においては北東部の蕨集落があげられる。分類A、Bの集落がひとつの水系沿いに形成されているのに対して、蕨地区は峠を挟むように集落が形成されており、集落の中に島の外岸に流れ込む水系と久賀湾に流れ込む水系の両方を含有しているという地理的特性を持っている。一見すると漁村に特徴的な集村形態をとり、実際に漁業や物流にも関わっているが、同時に周囲に耕作地が展開しており、特に尾根を越えた内幸泊には、久賀湾に面した広大な棚田を有している。いわば、外海と内湾（久賀湾）の資源を利用する生業形態が、土地利用に反映されているとみることができる。

空間配置から得られる視覚的特性と集落のつながりが一致していないという印象を受けるのではあるが、集落機能としては峠を挟んだ連続性を持っていたことが伺える。

このように、尾根を越えて内湾（久賀湾）と外海の資源を利用する生業形態は、久賀湾に面した集落でも確認できる。

久賀湾に面した大開集落、猪之木集落は、湧水を起源とする大開川、猪之木川が集落中央を流れ、下流域を中心に傾斜の緩やかな棚田を形成している。生業の中心は稲作であるが、9月

～10月にかけてはツバキ実採取を行う。両集落のツバキ林は外海に面した郷有林で、集落からは山の稜線を越えてアクセスしている。

一方、同じく久賀湾に面した久賀集落は、干拓以前は港を有し、久賀湾を利用した物流の拠点であった。また、久賀集落では折紙など、外海に面したツバキ林でのツバキ実採取を行っていた。久賀島における資源利用は、内湾と外海という異なった環境にある特徴的な資源を利用する点が特徴である。立地環境の違いにより異なった土地利用を見せる集落も、資源利用の観点からは集落内の資源のみならず、集落外の環境が異なる資源も巧みに利用する点で共通している。

久賀島を含めた五島列島周辺では、小値賀島の浦集落と在集落の関係のように、沿岸部の海産物と内陸部の農産物をめぐる集落相互の互助関係が確認できる。このような関係は、田ノ浦集落と市小木集落のように久賀島でも認められるが、久賀島の最大の特徴は、外海の資源としてツバキ実を採取し、さらに内湾の集落がツバキ実を直接採取に出かけている点にある。これにより、結果として各集落の資源利用の領域が広域に渡ることとなり、久賀集落に至っては久賀島の北端から南端までを活動領域としているのである。

このように、地形や水系の違いにより異なった特徴を見せる集落であるが、資源利用の観点からは、内湾域と外海域という異なった環境資源を巧みに利用する点で共通していた。中でも、ツバキ林は外海に面した環境に特徴的な資源として活用されており、特に内湾に面した集落での資源利用を特徴づける重要な要素となっている。

【奈留島の集落構造】

奈留島の地形を特徴づける四方に伸びた細長い半島の両側には、小規模河川の浸食により狭隘な谷迫地形が形成され、河口域には沖積地となり、やがて沿岸流の影響により、砂礫が河口域を塞ぐかたちで堆積し、砂州を形成する。砂州の背後（陸地側）は後背湿地やラグーン（潟湖）となっていった。小規模ながらも、このような地形が島内各地に多く点在するのは奈留島の地形的特徴といえる。

複雑な海岸線は、湾が深く入り込むことになり、そのような湾や入江は、古来、天然の良港として利用されてきたが、細長い半島地形の集合体とも言える奈留島においては、平野部が極端に少なく、集落が築かれる場所が限定され、生業を営み、居住に適した島とは決して言えない環境下にあった。

そのような状況下において、島内各地に多く点在する小規模な沖積地は、近世（18世紀末頃）まで未開拓地として残されていた。転機が訪れたのは、18世紀末以降の潜伏キリシタンの移住である。それまで未開拓地であった狭隘な圍繞景観を持つ谷地形の場所を、移住地（居住地）として選択し、砂州上または谷間の山腹に段畑や居住地を形成し、後背湿地やラグーンを水田地へと開墾していった。

奈留島では、各集落の地形的、地理的特質から尾根を越えての集落間のつながりは希薄であり、久賀島ほどのつながりは確認できず、各集落で完結する構造及び性格を有していた。

だが、奈留島西海岸の外海に面した集落においては、集落前面に広がる海域・瀬戸を利用して、対岸の久賀島（東海岸部の）集落との交流が図られてきた。

久賀島の集落は、集落間での互助関係が認められることは先述したが、瀬戸を挟んで対岸に位置する奈留島の西海岸集落との互助関係も確認できるのである。

特に、奈留島北西部一帯においては、狭隘な谷地形という典型的な移住集落景観を擁する江上集落と地下集落の大串集落との互助関係は、奈留島の他の移住集落と地下集落では見られない関係性であり、久賀島の集落の社会的関係性と通じる。

第2節 久賀島と奈留島との関連性

奈留島と久賀島は、その立地性と歴史的特性、瀬戸を介した交流（隣接する島とのつながり）によって、同一の生活・文化圏を形成した島ともいえる。

奈留島と久賀島は、近世期においては、五島藩の所領地となり、離島における統治機関として代官が置かれていたが、一人の代官が久賀島と奈留島の代官職を兼務する状況にあった。そのことから、歴史的にも同じ統治機構のもとに発展してきた生活・文化圏とも言えよう。

奈留島の主たる生業（産業）は、近代以降（明治後期）それまでの半農半漁の形態から、漁業へと変遷していったが、主な海産物は沿海漁業で獲れるイワシやキビナゴであった。主に干鰯として出荷していたが、煮干し加工も行うようになり、奈留島の主要特産物として成り立っていった。

煮干し加工には大量の燃料（薪）が必要であるが、奈留島はその地形的制約から、大量の薪燃料を確保することができず（燃料である薪を確保するには、島内の森林を供給源とするのが通常であるが、奈留島の場合は、伐採しすぎると急傾斜地のため国土の荒廃に繋がりやすい）、隣の久賀島に頼っていた。久賀島は「ツバキの島」として名高いが、近世以来、「久賀薪」として燃料用の薪の供給地としても知られていた。

奈留島と久賀島では、これらの生業活動を示す景観構成要素が島内の各所に残されている。奈留島では、イワシやキビナゴを天日干しするための「ガケダナ」の石積み基礎が島内各集落内に残されているが、特に大串集落、江上集落では、往時の生業活動を示す景観構成要素が良好に残されている。大串集落では、キビナゴ地曳網漁で使用したロクロ場の跡などが、また、キビナゴ地曳網漁が盛んであったころの信仰対象であった金毘羅宮や日枝神社なども生活・生業に関する重要な景観構成要素と位置付けられる。江上集落では、大串集落とキビナゴ地曳網漁の共同作業により得た資金で建設にこぎつけたエピソードを持つ江上天主堂（重要文化財）が、特に重要な景観構成要素として位置付けられる。

久賀島でも、キビナゴ地曳網漁が近世末期以降盛んにおこなわれた田ノ浦集落内にもロクロ場の跡は残されている。ただし、昭和40年代以降漁業形態の変化に伴い、現在では使用されなくなってしまったが、往時の姿を今にとどめている。

久賀島内に所在するヤブツバキの純林は、薪炭材用に雑木を切り出す際に商品価値があるヤブツバキを残した結果、純林化したものであり、「薪の供給地」としての生業活動の痕跡を示

す景観構成要素とも言えよう。

また、奈留島と久賀島のつながりは、宗教面でも確認でき、神社、カトリック教会の宗教的儀式においても密接な関係があったことが確認されている。

奈留島と久賀島は、互いの生業の需要と供給のバランスの上に成り立ってきた島であるともいえ、両島の関係性が独特な文化的景観の形成に作用してきたといえる。特に、奈留瀬戸を挟んで対面する久賀島西海岸部の集落と奈留島北西部の集落とのつながりは深く、互いの生活・生業を補完してきた。

第3節 文化的景観の本質的価値と保護を必要とする範囲

「五島市久賀島と奈留島の集落景観」は、五島列島に共通してみられる近世の潜伏キリシタンの移住の歴史を含めた集落の立地の在り方、瀬戸・入江・集落・耕地・山林からなる集落の構造が、瀬戸を介して向かい合う2島の関係も含めて、全体として良好に遺存する。また、移住は、往来が困難な山間部や入江のわずかな平地だけでなく、ラグーンの周辺にも行われたことを示すものである。

森林の利用の観点からは、久賀島の広い山林において生業に用いられるツバキ林と、瀬戸に面した斜面において粗放的な利用の在り方が見られる。タブノキ群の対比は、五島列島の典型的な植生を地形によって使い分けた当地の生業の在り方や居住の工夫を伝え、貴重である。

瀬戸を介して及ぶ集落構造の一体性の観点及び集落構造の遺存状況から、これらの価値を伝える範囲は、既選定範囲である久賀島全域に加え、大串・江上集落が所在する奈留島北西部及びこれらの周辺海域と奈留瀬戸であり、保護を行う必要が認められる。

第4節 景観構成要素

1. 景観構成要素の抽出の考え方

「五島市文化的景観(久賀島、奈留島)」の景観は、「森林の利用に関する景観地」、「居住に関する景観地」として典型的又は独特のものであり、また、それらに無形の要素が深く結びついていることが本質的な価値であることは本章で述べたとおりである。

以上の文化的景観の価値を伝えるうえで必要不可欠である景観構成要素を、以下の通り抽出した。

2. 景観構成要素一覧

(1) 景観構成要素一覧(久賀島)

(1) 景観構成要素一覧(久賀島)

1. 集落				
※集落の範囲には、居住地（歴史的石積み、集落が管理する宗教施設、墓地、家屋、里道、排水路）、生業空間（棚田、段畑、里山）、周囲の自然的空間（小河川、自然林、ヤブツバキ）を含むものとし、これらの要素を保全することを原則とする。				
番号	種類	名称	所有者等	備考
A	集落	外幸泊集落	自治会	
B	〃	蔵集落	〃	
C	〃	小島集落	〃	
D	〃	猪之木集落	〃	
E	〃	永里集落	〃	
F	〃	大開集落	〃	
G	〃	久賀集落	〃	
H	〃	市小木集落	〃	
I	〃	内上平集落	〃	
J	〃	田ノ浦集落	〃	
K	〃	外上平集落	〃	
L	〃	深浦集落	〃	

2. 居住地を構成する要素				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
1	住 居	久賀島観光交流 拠点センター (旧藤原邸)	市	
2	神社、寺、 教会堂	折紙神社	団体	
3	〃	禅海寺	団体	
4	〃	旧五輪教会堂	市	重要文化財

2. 居住地を構成する要素 (公共施設)				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
5	公共施設 (漁港)	細石流漁港	市	海域含む
6	〃	蕨漁港	〃	〃
7	〃	五輪漁港	〃	〃
8	〃	田ノ浦漁港	〃	〃
9	〃	野園漁港	〃	〃
10	公共施設 (公園)	折紙展望台	団体	〃
11	公共施設 (道路)	県道久賀島線	県	一般県道
12	〃	久賀・永里線	市	一級路線(市道)
13	〃	永里・細石流路線	〃	二級路線(市道)
14	〃	永里・猪ノ木路線	〃	〃
15	〃	大開・赤仁田線	〃	〃
16	〃	浜脇・野園線	〃	〃
17	〃	久賀島7号線	〃	その他の路線 (未舗装市道)
18	公共施設 (林道)	蕨林道	〃	林道
19	〃	永里林道	〃	〃
20	公共施設 (農道)	久賀線	〃	農道
21	〃	脇ノ内線	〃	〃

3. 自然的空間を構成する要素				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
22	ツバキ林	長浜のツバキ林	市及び集落	県指定天然記念物
23	〃	亀河原のツバキ林	市及び集落	風致保安林
24	〃	猪ノ木川	県	二級河川
25	〃	市小木川	〃	〃
26	〃	市管理河川	市	普通河川
27	海域	久賀湾及び 周辺海域	国、県	一般海域

(1) 重要な景観構成要素一覧(奈留島)

1. 集落				
※集落の範囲には、居住地（歴史的石積み、集落が管理する宗教施設、墓地、家屋、里道、排水路）、生業空間（段畑、里山）、周囲の自然的空間（小河川、自然林など）を含むものとし、これらの要素を保全することを原則とする。				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
A	集落	江上集落	自治会	
B	〃	大串集落	〃	

2. 居住地を構成する要素				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
1	神社、寺、 教会堂	日枝神社	団体	
2	〃	金毘羅宮	自治会	
3	〃	木徳宮	自治会	
4	〃	江上天主堂	宗教団体	重要文化財

2. 居住地を構成する要素（公共施設）				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
5	公共施設 （漁港）	大串漁港	市	海域含む
6	〃	江神漁港	〃	海域含む
7	公共施設 （公園）	旧江上小跡地	〃	
8	公共施設 （道路）	県道奈留島線	県	一般県道
9	〃	市道大串線	市	二級路線(9本)
10	〃	市道白這～江上線	〃	一級路線

3. 自然的空間を構成する要素				
番 号	種 類	名 称	所有者等	備 考
11	河川	江上川	市	普通河川
12	〃	先江上川	〃	〃
13	〃	上方江上川	〃	
14	〃	殿口川	〃	
15	〃	大脇川	〃	
16	〃	日崎川	〃	
17	海域	大串湾	国	
18	〃	奈留瀬戸	〃	
19	池・湖沼	池塚池	市	
20	植物	江上天主堂敷地内のタブノキ	宗教法人	重要文化財指定地
21	〃	皷ノ浦のハマジンチョウ群落	市	県指定天然記念物
22	地質鉱物	池塚のビーチロック	市	市指定天然記念物